

# セツルメントにおける保育と音楽の研究

Research on Childcare and Music in Settlement

迫 共

SAKO Tomoya

比治山大学

Hijiyama University

Key words: settlement, Shizue Yoshimi, Simkhovitch, Childcare, musical activities

## 目的と方法

日本の児童福祉行政の黎明期を支えた厚生省児童局保育課の初代課長、吉見静江（1897-1972）は、興望館セツルメントの職員として米国のセツルメントにおけるソーシャルワークを学び、日本の児童福祉に取り入れようとした人物であり、近年研究が進みつつある。本研究では米国のセツルメントにおける保育と音楽の活動に着目し、日米の差異について検討する。吉見は米国留学時に体験したセツルメントにおける音楽実践について繰り返し述べている。当時の米国セツルメントの保育事業における音楽と保育の関連性について、歴史文献をもとにした探索的な研究を行った。

## 結果と考察

吉見は留学中に滞在したグリニッチハウス・セツルメントの豊富な音楽活動について紹介している。

グリニッチハウス設立者の修道女シンホヴィッチ

（1938）は個別の音楽指導ではなく仕事を終えた大人と子どもが混ざって音楽を学び、家庭的雰囲気の中で音楽を楽しむ方法を採用した。「年長の生徒たちは、年少の生徒たちの成長に大きな関心を寄せている。小さな子ども達はグループで一緒にレッスンを受け、それぞれの演奏に興味を持ち、他の子ども達に刺激を与える。アンサンブルの子ども達は、ジュニア・オーケストラからシニア・オーケストラへと移っていく」「音楽学校全体に家族的な雰囲気があり、ハウスとの関係によって、医療・福祉施設と学校の生徒が触れ合うことができる」と述べている。音楽活動が人間的な生活環境の基盤になっていたと考えられる。

ニューディール政策が続き、戦争が迫る状況の1930年代後半には公的な教育福祉予算が縮減され、とりわけ効果が明瞭でない音楽などの活動は縮減対象となったが、その時期においても、セツルメントにおいては豊かな表現活動を通したソーシャルワークと保育が実践された。

吉見はグリニッチハウス・セツルメントをはじめとした米国のソーシャルワークの取り組みを学び、それを参考として、戦後日本の児童福祉政策の基礎を形成した。吉見（1948）は次のように述べる。「アメリカに於ては

二歳から五歳、六歳から十一歳、十二歳から十六歳、と幼児から学齢児をも含む子供を昼間保育の一貫した対象としている。（略）戦前我国に於てもセツルメントで保育所を持っていた所では学齢児の余暇指導をも併せ行って来たものがあつたが、今回児童福祉法によつてはこの種の仕事をする施設を児童厚生施設として新たに発足をさせているが、保育所に学童用の設備を加え、必要な人員を増す事によって保育所の卒業生を中心に近隣の学童の余暇指導をなす事は一つの児童厚生施設のあり方として、又保育所に加えられた近隣に対する新たな機能として、親達にも親しみあり、保育所としても有意義な成長の方向である事を信ずる。今日浮浪児対策を緊急必要とする折柄、又浮浪、不良の年齢の非常に幼い者に及んで来ている実情にてらし保育関係者の一考をうながし奮起せられん事を望んで敢て附言する次第である」。

吉見は保育所の運営のなかに、かつてセツルメントが担っていた地域福祉の機能を内包させようという意欲を持っていた。多方面の福祉の担い手のネットワークの中心的役割を保育所に求めたものと考えられる。ただし物心両面において貧窮していた戦後の保育所関係者に対してこれは、やや過大な期待だったといえよう。

米国のセツルメント活動の基盤にはキリスト教文化がある。多民族社会にあつて国籍、貧富、年齢、性別等の差なく、毎週人が集まる習慣と、社会貢献活動に音楽が多用される特徴があつた。こうした文化では日常生活を豊かにする音楽が根付いていた。日本でも宣教師らのセツルメントを中心に音楽を伴う社会貢献活動の文化は広がりを見せたが、戦争による宣教師らの帰国後には十分な定着が窺えなかったことは興望館の資料からも辿ることができる。真面目な社会貢献活動は定着したが、表現活動などの娯楽的側面は乏しかったのではないだろうか。

セツルメントは日本にも広がったが、協働的な社会活動を導く音楽など表現活動の文化の差異について引き続き着目し、検討を進めたいと考える。

## 主要参考文献

吉見静江（1948）松崎芳伸他、児童福祉、東洋書館  
Simkhovitch, M（1938）Neighborhood, Greenwich house